

# 絵本『おにたのぼうし』を読む(3)

—「ごっこ遊び」のてん末—

古 田 雅 憲

Descriptive Study on the Picture Book “Onita’s Hat” (3)

Masanori Furuta

絵本『おにたのぼうし』(ポプラ社 1969年)はあまんきみこさん(文)といわさきちひろさん(絵)のお二人の手になる作品\*<sub>1</sub>。それはまさしく「共作」と呼ぶのにふさわしく、その文(言葉)と絵との間に表現としての“主従関係”がない——どの頁・場面においても、言葉が絵の“説明書き”にとどまったり、絵が言葉の“なぞり描き”にとどまったりするようなことがない。その言葉と絵とは全体“ひとつの物語”を語り(描き)ながらも、それぞれが表す内容やその現し方にはときに“ずれ”を含んで支えあい響きあいつつ、その神話的とも見える物語世界へ私(読者)を変幻自在にいざなう。いま、この作品を絵本として味わいたいと願う所以である。

小稿では、「ぼうし」の含意について触れた前々稿\*<sub>2</sub>、主人公たちの現した「うそ」と「思いやり」について触れた前稿\*<sub>3</sub>に引き続いて、作品の結末部分に描かれる主人公たちのすれ違いについて、特に「ごっこ遊び」に興じる子供の姿に重ねあわせながら読み進めてみようと思うのだ。

なお念のため最初に明記しておきたい——以下に掲げる図版と本文はすべて、あまんきみこさん(文)・いわさきちひろさん(絵)の手になる『おにたのぼうし』(ポプラ社 1969年)から法令の趣旨に遵って引用した。

## 【21-22 頁の絵と言葉】

(下の図版及び本文は後掲・註1に明記した書籍から法令の趣旨に遵って引用した。)



物語の大きな変転を暗示するとても重要な絵だ。

ここまでいわさきさんは“世界を見守る者”として第三者的な視点から多くの場面を描いてきた。またいくつかの場面では〈おにた〉の視点

に寄り添って、言わば“おにたの代弁者”として彼の見た世界を描いてきた。(前々稿・前稿参照)

が、この絵は——もちろん第三者的な視点から描かれたものとも見えるのだが、〈語り手〉が口にする「いりぐちをとんとんとたたくおとがします。」という語り起こしの一文が〈おんなのこ〉の認知としても読めるうえ、続けて(いまごろ、だれかしら?)と彼女の内言が現されているからよけいに——この絵は〈おんなのこ〉の視点に寄り添って、言わば“おんなのこの代弁者”として彼女の見た世界を描いたものとも見えるのだ。だから私(読者)は〈おんなのこ〉自身になって、その少年の姿を見つめている(ような気になる)。

物語の大きな変転を暗示するとても重要な絵だ——〈おにた〉が物語のなかで関係を結ぶ“当事者”から見つめられるというのは、実に初めてのことなのだから。



なかば開かれた簡素な板戸を背に少年が立っている。この小さな家(11-12頁)の戸口だ。

土間にはベージュ色のズック。先ほど雪をすくいで出た〈おんなのこ〉が履いていたものだ(13-14頁)。脱いだ後、かかとを内に向け直されている。この家に住まう親子の生活信条がうかがわれるところだが、それでも左右ちょっと乱れて身を寄せあっているみたく、どこか心細げな気分をほのめかす。

戸口の壁際に黒いこうもり傘が立てかけられている。ずいぶん使い古したものらしく、つゆ先がひどく傷んでいる。室内の明かりに照らされて、その影が

土間から白い壁面にかけて映っている。傘布が白くにじんでいるのは、雪水を吸ってしっとり濡れたところが反射しているからだ。もしや〈おんなのこ〉は、この大きくて重そうな黒いこうもり傘を差して、降りしきる雪のなかお遣いにも出かけたのだろうか（まだ明るい時分のことだったろうが）。

外はとっぷり日暮れている。遠近の明かりが降りしきる粉雪にまぎれて紅紫や青紫の光暈となって、宵闇のなかに揺らめいている。室内の明かりは小さなものらしい、ようよう玄関先の雪を淡く照らし出すばかり。

戸口に立つ少年は左足だけ土間に踏み入れている。（どこか遠慮がちな様子だ。）オレンジのタートルネック・セーターとベージュのチノパンを身に着けている。足には黒くて大きなゴム長靴、頭には例の麦わら帽子。

もちろん私（読者）は彼が〈おにた〉であることなどお見通しだ、ずいぶんこざっぱりとした身なりをして、どこかちょっと大人びた雰囲気さえ漂わせているようには見えるけれど。（いつだってどこでだってパンツ一丁に裸足で過ごしていたくせに、そのおしゃれな服と立派な長靴はいったいどうしたんだい。）もしや壁際のこうもり傘は〈おにた〉が拾って差してきたものかとも思うけれど、彼の身体が雪まみれであるのを見れば、この傘はやはりこの家の持ち物なのだろう。

〈おにた〉は両手でなにか持っている——青いお盆みたいなもの。ふきんが掛けられているから、たぶん食べ物のひと品、ふた品など。よく見れば彼の両手の指先は真っ赤にかじかんでいる。鼻のあたかも左右のほほも赤くして——粉雪がしきりに降り続くなか、彼はずいぶん長いこと外にいたのだ、きっと。だから帽子もセーターも長靴も雪まみれになって。

彼はなにか言いたげにこちらを見つめている。その視線はもちろん〈おんなのこ〉に注がれているが、それはそのまま私（読者）のところまで届く。



私（読者）は知っている——この少年は「おにた」という名の「小さなくろおにのこども」だ。（3-4頁）

私（読者）は知っている——この少年は毎年の節分の晩ごとに人間から豆をなげうたれて棲みかを追われ、終（人間が鬼よけのため戸口に飾ったものだ）

の棘で目を刺さないよう用心しながら、心身とも辛い放浪をひとり続けている。(1-10 頁)

私(読者)は知っている——そういう境遇にあるからと言って、この少年は人間に対して怒りや抗議を露わにすることがなかった。彼は望むようには紡がれない人間との関係にわだかまりや悲しみを覚えつつも静かに状況を受け容れて、むしろ、そういう関係しか紡げない責任を自分の側に求め、そういう自分を隠すことで当面の平穏を得て生きてきた。(7-8 頁)

私(読者)は知っている——そういう生き方をこの少年が選び取ったのは、かつて彼がその二親と一緒に(その存在はそれと描かれはしないけれど)、きつと幸せな時間を過ごしていたからだ。なにせ彼は「小さなくろおにのこども」なのだ。彼がみずから“善良”なものであらうと固く決心し、実際そのように振る舞い、ときに(にんげんっておかしいな。おにはわるいって、きめているんだから。おににも、いろいろあるのにな。)とつぶやくのは、“善良”だった(そして、もういないかもしれない)《黒鬼のとうさんとかあさん》と過ごした記憶をきつといまも大切に抱いているからだ。(前々稿参照)

私(読者)は知っている——この少年が被っている「ふるいむぎわらぼうし」はきつと《黒鬼のとうさんとかあさん》から「つのかくし」のために授けられたものだ。だからその帽子は、自分を隠して過ごす孤独の放浪のなか、さまざまな現実的な痛み<sup>に</sup>心身を苛まれてなお“親子の愛情の絆”と“善良さ”を信じて生きるための<sup>よ</sup>すがとなった。そういう帽子だからこそ(つの隠しのための現実的な道具だからというばかりではなく)彼はそれをけっして脱ごうとしないのだろう。(前々稿参照)

私(読者)は知っている——この少年は周囲の状況や他者に対する認知力、想像力、共感力、思考力、表現力、行動力などを(もちろん未熟ながらも)身に備えている。だからこそ彼は、この小さな家に住まう親子の現す“愛情の絆”や“善良さ”を目のあたりにしたとき、そこに自分自身と《黒鬼のとうさんとかあさん》の姿を重ねあわせつつ、〈おかあさん〉の悲しみを思いやるとともに、特に〈おんなのこ〉の感じている“痛み”や“生きづらさ”を自分のことのように感じ取り、またその“痛み”や“生きづらさ”を黙って引き受けてい

る彼女の姿に自分自身の姿を重ねあわせることができたのだ。(前稿参照)

彼が〈おんなのこ〉のことを「ちび」と呼んだのは(自分だって小さいくせに)、彼女の小ささや幼さをちょっと軽く見ながら、しかし同時に親愛の情を気取りなく率直に表したからだ——まるで自分が実の《兄貴》でもあるかのように、まるで彼女が実の《妹》でもあるかのように。そして彼が「もうむちゅうで、だいどころのまどのやぶれたところから、さむいそとへとびだしてい」ったのは(19-20頁)、彼が(この親子のために自分が《頼もしい兄貴》となってなにかしなければならぬ)とばかり、衝動的で情熱的で切迫した強い感情にとらわれたからだ。(前稿参照)



この戸口にいま、どこか遠慮がちにたたずんでいる少年について、私(読者)はいろいろなことを知っている——しかし〈おんなのこ〉はなにも知らない(知らされない)。彼女がいまも向きあっているのは、そこに描かれたままの様子をした「しらないおとこのこ」(17-18頁)である。たとえば彼女が、病に伏している母親のために「思いやりのうそ」\*<sub>4</sub>をつくことができるほど多様で豊かな育ちを経ているとしても——その育ちのなかで彼女が周囲の状況や他者に対する認知力、想像力、共感力、思考力、表現力などを(もちろん未熟ながらも)身に備えていたとしても(前稿参照)——彼女の目に映るのはただの「しらないおとこのこ」である。(それは無理からぬことだ、実際〈おにた〉自身がそう仕向けたようなものなのだから。)



物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

いりぐちをとんとんとたたくおとがします。

(いまごろ、だれかしら?)

おんなのこがでていくと、ゆきまみれのむぎわらぼうしをふかくかぶったおとこのこがたっていました。そして、ふきんをかけたおぼんのようなものをさしだしたのです。

「せつぶんだから、ごちそうがあまったんだ。」

おにたはいっしょうけんめい、さっきおんなのこがいったとおりにい

いました。

〈語り手〉は、戸口を叩く音とそれに不審を覚えた〈おんなのこ〉の内言（いまごろ、だれかしら？）から場面を語り起こす——その人はこれまで第三者的な視点から、言わば“世界を見守る者”として言葉を紡いできたし、また時に〈おにた〉の視点に寄り添って、言わば“おにたの代弁者”として振る舞うことはあったけれど、ここでは明確に\*5 〈おんなのこ〉の視点に寄り添って、言わば“おんなのこの代弁者”として語りをなした。

この場面の絵がこれまでにない視点から描かれたと見えるように、この場面の言葉もまた新しい視点から紡がれたと読めて、まさに絵と言葉とが相まって物語の大きな変転を暗示しているようだ。



さて〈語り手〉が言うには、戸口に出た〈おんなのこ〉が見たのは「ゆきまみれの むぎわらぼうしを ふかく かぶった おとこのこ」だった——その表現をめぐって幾田伸司さん\*6 は、佐藤学さん\*7 や鎌田均さん\*8 や角谷有一さん\*9 のご指摘を踏まえて、次のように述べていらっしゃる。

佐藤学（2001）、鎌田均（2003）角田有一（2004）などは、「雪まみれのぼうし」という表現に着目し、女の子のためにおにたが懸命にごちそうを探し回ったのだという状況を読み取っている。

また次のようにも\*10。

佐藤学（2001）や鎌田均（2003）は、「雪まみれのぼうし」という形容から、おにたが懸命にごちそうを探し回ったのだという状況を読み取っている。ぼうしが「雪まみれ」になるほど、おにたは戸外を探し回っていたのだという解釈は、「雪まみれ」という記述を的確に捉えている。

なるほど、みなさんがおっしゃるとおり、その表現の向こうに〈おにた〉が

時間をかけて懸命にご馳走を探し回ったという経緯を読み取らなければなるまい——なにしろ〈おにた〉は(あのちび、なにもたべちゃいないんだ)と思うやいなや「もうむちゅうで」飛び出していったのだから(19-20頁)。さぞかし懸命に真剣に、きっと時間も忘れてご馳走を探し回ったに違いない。

ただ絵をよく見ると、雪は〈おにた〉のセーターの両肩や長靴の甲のあたりも覆っているから、〈おんなのこ〉が見たのはまさに全身「ゆきまみれ」の少年だった——ということは、最初〈おにた〉は確かにご馳走を探しに(パンツ一丁で)飛び出していったのだけれど、きっとすぐに思い直したのだ、たとえば(そうだ、ご馳走をせっかく持ってったって、こんな真冬の晩においらがパンツ一丁に裸足のまんまで現れちゃったら、あのちび、きっと驚いちゃうだろうな。つの隠しの帽子を被ってるだけじゃあダメだな)みたく。

〈おにた〉は彼女を驚かせたり不審がられたりしたくない一心で(彼女に受け容れてもらいたい一心で)、まず衣服と長靴を身に着けて、それから懸命にご馳走を探し回ったのだ。だから帽子だけでなくセーターも長靴も「ゆきまみれ」になって——その間の事情について〈語り手〉はなにも語らないけれど。



となれば、まず「〈おにた〉がどうやってその衣服と長靴を手に入れたのか」ということについて考えてみたくなる。

ちなみに幾田伸司さん\*11は、読者たちが抱く「〈おにた〉がどうやってこれらのごちそうを手に入れたのか」との疑問について取り上げるなかで、次のように述べていらっしゃる。

おにたが「しばらく」の間に、女の子の言ったとおりの「赤ごはん」と「うぐいす色のにまめ」を手に入れて女の子の家の戸口に立つという状況は不自然であり、ストーリー上の瑕疵だとも見える。それゆえ、ストーリーの整合性を保とうとする読者であれば、こうした不自然さはあえて見過ごすという選択肢もあるだろう。一方で、おにたがどうやってこれらのごちそうを手に入れたのかという疑問は、素朴な問いとしてしばしば発せられるものであるし、立ち止まってしまう読者も少なくない。当然起こるであろうこうした素朴な問いを学習者の読みにどのように生かしていくか

は、教材分析や発問の課題として指摘されている。(下線は論者が私に施した)

至言である。幾田さんのおっしゃる「こうした素朴な問い」を“絵を読む”際にも大切にしたい——〈おにた〉はその衣服と長靴をどこでどうやって手に入れたのか。

幾田さん\*12は、ご馳走の入手先をめぐって読者が紡ぎ出した解釈を、次のように整理してくださった。いま、それを援用しながら〈おにた〉が衣服と長靴を入手した経緯について考えてみたい。

- A おにの家族のところ、あるいはおにの世界に取りに行ってきた。
- B おにたが魔法を使って出した。
- C まことくんの家から持ってきた。
- D どこかの家から盗んできた。
- E どこかの家からもらってきた。

そのうちAやBの解釈は採りにくい——物語の世界観や人物観の読みに関わる設定や構造を根幹から揺るがしてしまうから。

もしや〈おにた〉が自由自在に「おにの世界」と「人間の世界」を行き来して望みの品を易々と手に入れられたとするなら、もしや〈おにた〉自身が「魔法」を使うことさえできたとするなら、それで衣服と長靴を簡単に手に入れられたとするのなら、〈おにた〉のこれまでの生き方や考え方や感じ方を私(読者)はどう理解し直せば良いのだろう——それはとても難しい。

「おにの世界」に取りに行くのであれ「魔法」を使うのであれ、いったいそれほど簡単に(言わば“特権的な立場や能力”を使って)物事を解決してしまえるのであれば、これまで〈おにた〉が毎年の節分ごとに孤独な放浪を強いられてきたことや、そのなかで彼が“痛み”や“生きづらさ”を甘受し続けてきたことや、また目の前の親子が現す“愛情の絆”と“善良さ”を見た〈おにた〉



が自身の境遇と重ねあわせながら強い共感を覚えたことや、それゆえ彼が（この親子の役に立ちたい）とばかり衝動的で情熱的で切迫した思いに駆られて外に飛び出して行ったことや——私（読者）がこれまで心に刻んできた物語世界のあれやこれやがすべて意味を失ってしまいかねない。そもそも衣装であれ食糧であれ簡単に手に入れられたとするなら、全身「ゆきまみれ」になってまで探すこともなかったろう。〈おにた〉はそういう“特権的な立場や能力”を持たない、ただの「小さなくろおにのこども」だった——やはりAやBの解釈は採りにくい。



またEの解釈も採りにくい——真冬の晩にパンツ一丁の子供が裸足でやってきて、たとえば「衣服と長靴を貸してください」などと言ったなら、（つの隠しの帽子だけは被っているから「くろおにのこども」だとはバレないかもしれないけれど）、その“ただ者”とは思われない様子を見て怖がったり怪しんだりした人は、きっと慌てて戸をぴしゃりと閉ざしてしまうに違いない。あるいは“ただ事”とは思われない様子を見て大いに心配したり同情したりした人だって、ともかくも衣服や長靴を貸してやろうとは思うだろうが、ただその前にとりあえず詳しい事情を尋ねようとするに違いない。長々とした説明と聴取のやりとりは正体を隠したい〈おにた〉にとってみれば厄介事にはかななるまい——〈おにた〉はこれまで用心深く人目を避けてきたのだ、いまさら厄介事にうかうかと巻きこまれようはずもない。〈おにた〉はそれくらいの認知力、想像力、共感力、思考力、表現力、行動力は身に備えている（前稿参照）——やはりEの解釈も採りにくい。



となればCやDの解釈だ——そう、こないだまで過ごした〈まことくん〉ちで、雨にあたりそうな洗濯物を取り込んであげたり、おとうさんの靴をぴかぴかに磨いてあげたりしたことのある〈おにた〉だもの（5-6頁）、人間がときどき洗濯物を軒先や干し場に置き忘れてしまうことや、玄関先の靴箱のなかや物置小屋の片隅あたりに長靴がしまわれていることくらいきつと知っている。〈おにた〉は〈まことくん〉ちだかどこの家だかの軒先や干し場や玄関先の靴

箱や物置小屋あたりから、オレンジのタートルネック・セーターとベージュのチノパンと大きな黒い長靴をこっそり失敬してきたに違いない。

しかしながら、この解釈は「〈おにた〉が“盗み”を働いた」とする想像だ。(もっとも本人にしてみれば“寸借”のつもりだったかもしれないのだけれど。)

私(読者)は知っている——〈おにた〉はみずから“善良”なものであろうと固く決心し、実際そう振る舞う子供だった。もしや〈おにた〉がそれと自覚して“盗み”を働いたとするならば、彼は日頃の決心と振る舞いをみずから裏切ったことになる——それは私(読者)にはどうにも信じられない(信じたくない)。

が、わざわざ「むぎわらぼうしを ふかく かぶった(下線は論者が私に施した)」のは、もしや盗みに初めて手を染めてしまった自分を羞じる気持ちの表れと思えなくもない。やはり〈おにた〉は“盗み”に手を染めたのだろうか。

もっとも、いつもより帽子を目深に被っていたのだから、それは人間の子供に上手くなりすましたつもりでも〈おんなのこ〉を前にして自信がどうにもなくなって、思わずそうしただけのことだったかもしれない——となれば〈おにた〉が“盗み”を働いたとは、やはり断定はできない(したくない)。

ただ私(読者)の思いはどうあれ、もしやほんとうに〈おにた〉が“盗み”に手を染めたのだとしても、それはきっと、この小さな家に住まう親子の現す“愛情の絆”や“善良さ”を目のあたりにして、その家族のひとりみたく受け容れてもらいたい一心から、ついついそうしてしまったのに違いない。ともかくも受け容れてもらいたい一心で、ついつい“不善”をなすという変節をみずからに許してしまったのに違いない。もちろん“不善”をなして“善良”なものに繋がろうなどとは道理の破綻に違いないが、そうまでしても目の前の親子が現す“愛情の絆”の一端に結ばれることを〈おにた〉は心から欲したのに違いない。なにせ彼はまだ子供なのだ、情状酌量の余地もまたあろうというものだ。

まして〈おにた〉にしてみれば“寸借”のつもりだったかもしれないのだ(自分が“盗み”を働いたとは自覚さえしていなかったかもしれないのだ)——もしやそれと自覚して“盗み”をなしたわけではなかったとしたなら、その罪は

さらに一等減じられるべきだろう。

〈おにた〉が衣服や長靴をもしや盗んでいたとしても、また断りもなく寸借していたとしても、それは子供心のつつい為した軽拳と言うべきで、彼はいまなお「みずから“善良”なものであると固く決心し、実際そう振る舞おうとする」その本性まで失ってはいまい——そうであってほしいとの願望も含め（いや、むしろそうであってこそ、彼が帽子だけを残して姿を消してしまった結末が重要な意味をもつはずだ）、やはりCやDの解釈に従いたいと思う。



私は想像する——衣服と長靴を身に着けた後（もちろん帽子も被って）、〈おにた〉は人間の子供を装って家々を訪ねたろう、なん軒もなん軒も。たとえば「おいらの《ちびの妹》がおなかをすかせているので、少しばかりでも食べ物を分けてください」などのようにお願いしながら、懸命に真剣に、きっと時間も忘れて訪ね歩いたのだ。ときに柵の棘が目を刺して、彼は涙さえ浮かべていたに違いない。やがて一軒の家で「あかごはんと うぐいすいろの にまめ」\*13を分けてもらった。それがまだ「ゆげを たててい」るのは、その家の人が気の毒がって温め直してくれたからだ。それが冷めないよう大急ぎで〈おにた〉は〈おんなのこ〉のところへ戻ったのだ。ずいぶん長いあいだ外にいたので、〈おにた〉は全身「ゆきまみれ」になっていた。

もはや〈おにた〉がご馳走を盗んだとは考えられない——〈おんなのこ〉が「いまごろ、だれかしら」と言うぐらいの遅い時刻であるにもかかわらず、〈おにた〉が持ってきたご馳走が「ゆげを たてて」（次頁）いたというのだから。そういう時刻であれば、どこの家であれ夕餉のご馳走が余っていたとしても、それはすっかり冷えていよう。もしや〈おにた〉がその冷えたご馳走を盗んだとしたなら、彼はその屋の台所でわざわざ温め直しの一手間をかけたことになる——〈おにた〉はこれまで用心深く人目を避けてきたのだ、いまさら厄介事にうかうかと巻きこまれる危険を冒すなどとはどうにも思えない。やはり〈おにた〉がご馳走を盗んだとは考えられない。

衣服と長靴をちゃんと着て（盗んだか断りもなく寸借したかはしれないけれど）、湯気を立てるご馳走をちゃんと手にして（たぶん分けてもらったのだら

う)、〈おにた〉は〈おんなのこ〉のもとにちゃんと戻ってきた。そのことじたい、〈おにた〉が自他の状況を認知し、その内容に従って他者の内面を想像し共感し、その情感に即して、その場に必要とされる振る舞い方を考えて、その振る舞いを実行するスキルさえ備えていることの現れだ——〈おにた〉は立派に育ちつつある子供なのだった。(前稿参照)



ただし(多くの方々がすでに指摘していらっしゃるとおり)、このとき〈おにた〉が〈おんなのこ〉のことを思いやって「いっしょうけんめい」に振る舞ったから、彼女は目の前の「知らないおとこのこ」を(それなりに驚いたにせよ)受け容れたけれども、ただ彼が帽子を脱がなかった、あるいは脱げなかったから(たぶん〈おにた〉に〈おんなのこ〉を騙すつもりはなかったろうし、ただ驚かせたくない一心で帽子を被ったままでいたのだろうが)、彼女は「くろおにのこども」としての〈おにた〉を受け容れたわけではけっしてなかった——が、ともかくも「受け容れてもらった」みたくて〈おにた〉はとても嬉しかったろう。その嬉しさのあまり、(自分を家族のひとりみたく受け容れて欲しい)という願いの本旨が叶えられたわけではなかったことさえ見失っていたのかもしれない。

せんないことかもしれないが(このとき〈おにた〉が帽子を脱いで〈おんなのこ〉に向きあっていたなら)と思ったりもする。さかのぼって扉絵に改めて目をやれば、そこには帽子を脱いだ〈おにた〉が〈おんなのこ〉に向きあってなにやら話しかけている様子が描かれている——もしや〈おにた〉が、たとえば「おいら、黒鬼の子なんだけど悪さなんかゼツタイしないよ。鬼にもいろいろあるんだよ。これからご馳走を探してきてやるからさ、ちょっと待ってなよ」などと言ったとするなら——そのとき〈おんなのこ〉は〈おにた〉自身のことを自分の家族のひとりみたく受け容れたらうか。そういう“もうひとつの物語”がそこから紡がれたらうか。



さて〈おにた〉は〈おんなのこ〉を見つめ、〈おんなのこ〉は「知らないおとこのこ」を見つめて——その交わらない視線のすれ違いのなかで物語は進ん

でいく。〈おにた〉は「せつぶんだから、ごちそうがあまったんだ。」と「いっしょうけんめい、さっき おんなのこが いったとおりに」言ったのだそうだ。それはもちろん〈おんなのこ〉が口にした「思いやりのうそ」を「ほんと」に変えてしまう「思いやりのうそ」だ。鎌田均さん\*14は「先刻母親の前で懸命についた女の子の嘘が「おにた」によって現実のものに変えられる」とおっしゃったが、〈おにた〉とはそういうことを「いっしょうけんめい」にやり遂げることのできる、実に立派に育ちつつある子供なのだった。(前稿参照)

### 【23-24 頁の絵と言葉】

(下の図版及び本文は後掲・註1に明記した書籍から法令の趣旨に遵って引用した。)

物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

おんなのこはびっくりして、もじもじしました。

「あたしにくれるの？」

そっと ふきんととると、あたたかそうな あかごはんと うぐいすいろの にまめがゆげを たてています。

おんなのこの かおが、ぱっと あかくなりました。そして、にこっと わらいました。

目の前の「しらない おとこのこ」が「せつぶんだから、ごちそうがあまったんだ。」(前頁)と言ったのを聞いて、〈おんなのこ〉はまず「びっくりして、もじもじし」たのだそうだ。彼の言葉が「さっき おんなのこが いったとおりに」(前頁) だったからだ——〈おんなのこ〉にしてみれば、「しらない おとこのこ」の示す唐突な好意には当惑するしかないし、まして自分がさっき言ったことをそのまま言われてしまった(どうして知っているのだろうか)と不思議がったり(どこで聞かれたのだろうか)と恥ずかしかったり、さっきのうそがバレたみたいで「びっくりして、もじもじ」するほかもない。

しかも少年が差し出してくれたお盆の、その上に掛けられた布巾を取って見れば、そこには「あかごはんと うぐいすいろの にまめ」が湯気を立てていた。

それを自分にくれると少年は言う。彼女の「かおが、ぱっとあかくなり」「そして、にこっとわら」ったのだそうだ。その日、夕ご飯を食べずにいた彼女にしてみれば、ほわほわと湯気を立てるご馳走を目の前にしては嬉しくないはずもない。

が、彼女の顔に赤みがさした理由はそれだけではない。

さっき彼女は、夕飯の用意ができずに辛い思いをしている〈おかあさん〉を安心させたくて「しらないおとこのこが、もってきてくれた」「あったかいあかごはんと、うぐいすめ」を食べたから大丈夫だとうそをついた。思いやりから発したうそだ。それを聞いた〈おかあさん〉が「ほっとしたようにうなずいて」(ほんとうは安堵などできなかったろうが)眠ったあと、彼女は「ふーっとながいためいき」をついた(17-18頁)——うそをついたことのうしろめたさ、うそまでついて示した思いやりの懸命さ、その懸命さが報われた(と思った)安堵、今日のひもじさと明日への不安などなど、さまざまなことに押しつぶされそうな幼な心からついつい漏れ出た「ながいためいき」だ。(前稿参照)

そのときの「思いやりのうそ」がいまも「うそ」ではなくなったのだ。

目の前の少年の素性や彼が自分の言ったことをどうして知っていたのかなどなど不思議なことや奇妙なことは多々あるにせよ、なにはともあれ彼女の心と身体はずっと軽くなったに違いない——「ながいためいき」をついた彼女の顔(寒さとひもじさと不安のせいで、たぶん青白い顔をしていたろう)に赤みがさして「にこっとわら」たのはそういうわけだ。彼女は目の前の「しらないおとこのこ」を確かに受け容れたのだった。



傘つき電球の小さなひとつ明かりの下、〈おにた〉と〈おんなのこ〉が向かいあって座っている。

二人がお行儀よく正座しているのは、戸口に続くお台所の片隅だろう(19-20頁)。たぶんふすま一枚隔て

た隣のへやに〈おかあさん〉がとろとろと眠っている (15-16 頁)。

二人の間には大小二枚の皿を乗せた青いお盆が置かれている——さっき〈おにた〉が手にしていたものだ (前頁)。大きい皿には赤い粒々を混ぜ込んで柔らかく炊いたふうの一品が、小さい皿には緑褐色の粒々をくたくた煮たふうのもう一品が、それぞれ湯気を立てている。どちらも食べ物だ、赤いお箸が添えられているし。もちろん〈語り手〉の言う「あたたかそうなあかごはんとくぐいすいろのにまめ」を描いたものだ。

その「ごちそう」をはさんで向かいあう二人は、まるで“ままごと”に興じているかのようだ。少年を見やっている〈おんなのこ〉は手にした布巾をたたみながら口許をほころばせている——少年に向かって「にこっと わらい」かけているのだ。(とても穏やかで柔らかな表情だ。)〈おにた〉の表情は見えないが、手を膝にぎゅっと当てて、足の指をもじもじ開いたり閉じたりしているみたくて、もしや少し緊張しているのかもしれない。(真っ赤にしもやけした足指がむず痒かったりもするのかしらん。)

二人がじかに座っている床はきっと冷たかろう。が、そういうことを気にも止めない様子で〈おんなのこ〉は微笑みながら少年を見つめている。その姿を見て私 (読者) はなにやら幸せな心持ちになる。たぶん〈おにた〉もまた——〈おんなのこ〉に受け容れてもらったような気がして、もしや彼女ら親子が現す“愛情の絆”の一端に繋がることさえできたかもしれないと思ったりもして、とても幸せな心持ちでいるだろう。(もちろん〈おんなのこ〉が受け容れたのは「しらない おとこのこ」であって〈おにた〉ではなかったから、彼の幸せな心持ちはかりそめのものにすぎなかったのだけれど。)



ふたりの様子は“ままごと”に興じる子供たちのそれにそっくり重なる——たとえば私の知る子供たちが《お皿》に見立てた葉っぱの上に《ご馳走》に見立てたドングリだの綺麗な小石だのをたんよそって、おたがいに相談しながら交代々に《お父さん》になり《お母さん》になり《お兄ちゃん》になり《妹》になり《ねこちゃん》にさえなりながら《家族の楽しい夕餉の一時》を演じて遊んで幸せな心持ちを共有しているような——あの“ごっこ遊び”としての

“ままごと”の光景だ。

もっとも〈おにた〉に“ごっこ遊び”をしているつもりなどない——たとえ彼が目前の名前も知らない〈おんなのこ〉のことを「ちび」と呼んで《妹》みたく思い、それで自分自身は《頼もしい兄貴》になったようなつもりで（なんとか彼女たち親子の役に立ちたい）と心のなかで強く願っていたとしても。（前稿参照）

ただ〈おにた〉がさっき、オレンジのタートルネック・セーターとベージュのチノパンを着て（もちろん）帽子も被って〈おんなのこ〉の前に立ったとき（彼女に「知らない おとこのこ」がほんとうに来たと思わせてしまったとき）、彼は（実はただ彼女を驚かせたくなかっただけのことだったにせよ）結果的に「小さなくろおにのこども」としての“現実”の自分を離れ、彼女の思う「知らない おとこのこ」として“ごっこ遊び”をそれと自覚しないまま始めていたのだった。そのとき（なんとか《頼もしい兄貴》になって《ちびの妹》や《おかあさん》と繋がっていたい、なんとか親子の役に立ちたい）という〈おにた〉の願望の世界が（彼自身さえそれと自覚しないうちに）“ごっこ遊びの世界”としてそこに立ち現れた。

そのなかで〈おにた〉はそれらしく振る舞い、また〈おんなのこ〉にもそれらしく振る舞うことを期待した。（彼に罪はあるまい、子供が“ごっこ遊び”に夢中になるのは自然のことだ。）実際〈おんなのこ〉は「にこっとわら」って応じてくれたから、いよいよ〈おにた〉の“ごっこ遊びの世界”はそれらしくなり、だが“ごっこ遊び”をしているつもりなどない〈おにた〉にしてみれば、その“ごっこ遊びの世界”がいかにも“現実”であるかのように感じられたというわけだ——〈おにた〉がいま“現実”だと思って過ごしている世界はすべて〈おにた〉の願望が創りだした“ごっこ遊びの世界”で、言わば「物語のなかの物語」にすぎない。



かたや〈おんなのこ〉は〈おにた〉の“ごっこ遊び”に（知らぬ間に）参加させられているなどとは思ってもいない。彼女は彼女自身の思う“現実”の世界にいる——彼女は「あたし」（25頁）以外のなにものでもないし、彼女の目



の前にいる少年は（なぜだかわけも分からず不思議このうえないけれど）自分に優しくしてくれる、また自分のついた「うそ」を「ほんと」に変える奇跡を現してくれた「知らないおとこのこ」でしかない。

ただし彼女がいま“現実”だと思って見ている世界は、実は〈おにた〉と彼女自身の「思いやりのうそ」の積み重ねが仮構した“思いやりのうその世界”だ。それもまた、言わば「物語のなかの（もうひとつの）物語」にすぎない——オレンジのタートルネック・セーターとベージュのチノパンを着て（もちろん帽子も被って）自分の前に現れた〈おにた〉のことを、自分がさっきついた「思いやりのうそ」を「ほんと」に変える奇跡を現してくれた「知らないおとこのこ」として受け容れたとき、彼女はその世界を“現実”だとばかり思い込んだ。（ふたりに罪はあるまい、子供たちなりに現した思いやりに発したことだ。）

要するにふたりとも“現実”を離れて、〈おにた〉は自分自身の願望が紡いだ“ごっこ遊びの世界”に（それと気づかないまま）浮遊し、〈おんなのこ〉は〈おにた〉と紡いだ“思いやりのうその世界”に（それと気づかないまま）とらわれているのだった——ふたりとも“現実”の世界にいるとばかり思い込んでいるけれど、ふたりともそれぞれ別々の“非現実”の世界にいたのだった。（ひとりには“ごっこ遊びの世界”に、もうひとりには“思いやりのうその世界”に。）彼らはいま、ここで“時空”を共有してはいるけれど“現実”を共有してはいない。だから彼らがいま、ここでそれぞれ「幸せな心持ち」になっていたとしても、それらもまたけっして通いあうことがない。

そして——終わらない遊びがないように〈おにた〉の“ごっこ遊びの世界”にもお仕舞いのときが来るだろうし、またバレないうそがないように〈おんなのこ〉がとらわれている“思いやりのうその世界”もほどかれるときが来るだろう。そのとき、彼らがいま、ここで（すれ違ったまま）感じている「幸せな心持ち」もまた露と消えるしかないだろう。

#### 【25-26 頁の絵と言葉】

（下の図版及び本文は後掲・註1に明記した書籍から法令の趣旨に遵って引用した。）



物語の大きな変転を（今度は）明示するとともに重要な絵だ——帽子を被った〈おにた〉と〈おんなのこ〉がひとつ画面の内に描かれて、しかもふたりがなにがしか関わりあっているらしい様子を現しているのは、

この物語のなかでは実に初めてのことだから。（扉絵には帽子を脱いだ〈おにた〉が〈おんなのこ〉に語りかけているらしい様子が描かれているが、たぶんそれは語られなかった“もうひとつの物語”の一場面だ。）



見開き画面の右端（25 頁右端）に〈おんなのこ〉の横顔が、また画面の左半（26 頁）に〈おにた〉のほぼ全身がそれぞれ描かれている。

〈おんなのこ〉は顔をちょっと上げて、立ち上がった少年の方を見遣っている——が、彼女の瞳はどこかうつろで、その視線は力なく宙をさまよっているように見える。そう言えば、彼女の横顔からは先ほど（前頁）の幸せそうな微笑みがすっかり失われてしまっている。（なにやらもの思わじげな様子だ。）

かたや〈おにた〉は目を大きく見開いて〈おんなのこ〉を凝視している。身体のあちらこちらにひどく力が入っている——左の手指はなにが握ろうとするかのように丸まっているが、それは手や腕の筋肉に無駄に力が入って縮こまっているからだ。右の手指も楽に伸ばしていると言うよりも、力を入れてしっかりと開いているようだ、ちょうどジャンケンのパーみたく。両肩もさっき戸口から入ってきたとき（21-22 頁）と比べればずっとこわばっている——彼はいま、ひどく衝撃を受けているのに違いない、なるほど口があんぐり開いているわけだ。

ふたりの様子を見て、私（読者）は容易に思い至る——ああ、ふたりの関係にいましも深いひびが入ったのだろう。もしや〈おにた〉の“ごっこ遊びの世界”が仕舞えたか、もしや〈おんなのこ〉がとらわれている“思いやりのうその世界”がほどかれたか、あるいはその両方か。



物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

おんなのこがはしをもったまま、ふっと なにか かんがえこんでいます。

「どうしたの？」

おにたがしんばいになってきくと、

「もう みんな、まめまき すんだかな、とおもったの。」とこたえました。

「あたしも まめまき、したいなあ。」

「なんだって？」

おにたは とびあがりました。

「だって、おにがくれば、きっと おかあさんの びょうきがわるくなるわ。」

おにたは てを だらんと さげて ふるふるっと かなしそうに みぶるいして いました。

「おにだって、いろいろ あるのに。おにだって…」

〈語り手〉が言うには、手にした箸を不意に止めて〈おんなのこ〉は考え込んでしまったのだそう——なるほど、描かれた彼女の横顔を見て私（読者）が（なにやらもの思わしげな）と感じたわけだ。その様子を見てやはり〈おにた〉も「しんばいになっ」た。彼が声をかけてみると彼女は「もう みんな、まめまき すんだかな、とおもったの。」と答えたのだそうだ。

「まめまき」と聞いて〈おにた〉が「とびあが」るほど驚くのは当然だ。しかも彼女は続けて「あたしも まめまき、したいなあ。」とさえ言ったのだ——なるほど、彼の全身が力みかえっているわけだ、ひどく緊張しているのだ。このページの左右に描き分けられたふたりの姿は、まさしくその瞬間を写しとったものだった。

〈おんなのこ〉は湯気を立てるご馳走を目の前にして、そのうえ自分のついた「うそ」が「ほんと」に変わって、心も身体もすつと軽くなったみたくて、そういう幸せな心持ちで赤いお箸を手にしたのだろうが、ふと今宵が節分の晩

だったと思い出すにつけ急に〈おかあさん〉のことが気になったのだ——「もうみんな、まめまき すんだかな」と言ったのは、たとえば（よその家々から追い出された鬼たちは、きつとうちに来るわ、だってうちだけ豆まきしてないんだもの）という不安な心持ちの現れだ。

もちろん以前の彼女だったなら、あの〈まことくん〉や今日の多くの子供たちと同様に、たとえば（闇に潜んで災いをなす鬼を懲らしめ追い出して、家族のみんなを守らなきゃならない）などといった使命感や切迫感など心底からは持つはずもなかったろう——いまや「豆まき」は毎年恒例、年中行事としての“遊び”なのだ、今日の子供たちにとっても、〈まことくん〉にとっても、また〈おんなのこ〉にとっても。ただ彼女はいま、困窮する日々の暮らしと周囲からの孤立のなか、ふたりっきりで過ごす〈おかあさん〉の病気を「思いやりのうそ」をついてまで懸命に支えている。そういう彼女の不安が「疑心」となって（文字どおり）「暗鬼」を「生ず」るのは当然のこと——彼女が「あたしもまめまき、したいなあ。」と願ったとしても、それは実に致し方もないことではないか。

もしや彼女が、目の前にいるのが“親子の愛情の絆”を切望する“善良”な「小さなくろおにのこども」だと知っていたなら、そう知ったうえで〈おにた〉自身と向きあっていたならば、もしや彼女は豆まきのことなど口にしなかったかもしれない、だって彼女は「思いやりのうそ」さえつける子供なのだもの。しかし彼女はなにも知らなかった。「知らなかった」ことで彼女が〈おにた〉を傷つけたとしても、それは「知らされなかった」彼女のせいではあるまい。また「知ろうとしなかった」からとて〈おんなのこ〉を責められはしまい——それは致し方もないことだ、実際、〈おにた〉自身がそうなるように仕向けてしまったようなものだったから。その責めは「知らせなかった」〈おにた〉自身が負うべきことだ。もっとも〈おにた〉にしてみても、どうしたって「知らせられなかった（できなかった）」には違いないのだけれど。



結局、誰かを責めることなどできはしまい——すべて致し方もないことだったのだ。〈おにた〉がそれと自覚しないまま“ごっこ遊び”に興じていたのも

(子供がそれに夢中になるのは自然のことだ)、また〈おんなのこ〉がそれと自覚しないまま“思いやりのうその世界”にとらわれているのも(子供たちなりに現した思いやりに発したことだ)、その“世界”で彼女が目の前の少年に(豆まきしたいな)と率直に願ったことも。(言わば「疑心暗鬼」の彼女がそれを願うのはもっともなことだ、しかも目の前にいるのが「小さなくろおにのこども」などとは知るよしもなかったのだし。)

そのあと〈おにた〉の“ごっこ遊びの世界”が消え失せざるをえなかったことや、“現実”に直面せざるを得なかった〈おにた〉が言葉に尽くせぬ悲しみを味わったこともまた、起ころべくして起こったことに過ぎない。すべては〈おにた〉がさっき、オレンジのタートルネック・セーターとベージュのチノパンを着て、もちろん帽子も被って〈おんなのこ〉の前に立ったとき、そういう〈おにた〉を見た彼女が「しらないおとこのこ」がほんとうに来たと思ったときに、こうなるように決まっていたのだ。すべて「致し方もないこと」であり「起ころべくして起こったこと」だ——誰かを責めることなどできようか。



“ごっこ遊びの世界”のなかで《頼もしい兄貴》として《ちびの妹》と向きあっていたつもりでも、いったん“遊び”が仕舞えて“現実”に立ちかえてみれば、〈おんなのこ〉はもう《ちびの妹》ではなかったし、となれば〈おにた〉もまた《頼もしい兄貴》ではなくなって、もとの「小さなくろおにのこども」に立ちかえるしかなかったわけだ——黒鬼の子供はやっぱり人間の子供ではなかったし人間の子供の兄妹でもなかった。しかも今宵は、自分が人間たちから疎まれ遠ざけられる存在であることを特に思い知らされる晩だった——人間たちからすれば年中行事の“遊び”のようなものだったかもしれないけれど、小さな黒鬼の子供が“現実”として引き受けた悲しみは、どんなに言葉を尽くしたところで言い表せぬものだったろう。彼は——自分の“善良さ”はどうしたって認められず、けっきょく“親子の愛情の絆”には繋がりにえない——と思い込んだのだった。

もしやそのとき〈おにた〉が帽子を脱いでいたなら、たとえば扉絵に描かれているみたく。そしてたとえば「おいら、ほんとは黒鬼の子なんだけど悪さな

んかゼツタイしないよ。鬼にもいろいろあるんだよ。」などと言えていたなら——が、彼は帽子を脱ごうなどとは思いつかなかった。だって「帽子」は、たぶん《黒鬼のとうさんとかあさん》から、たとえば「いつだって被っておくように」みたく教え諭されて与えられたものだったに違いないから。(前々稿参照) その「帽子」は二親が(良かれ)と思って息子に与えた「助言」だったが、それと同時に息子に(自分を隠すしかない)と思込ませる“呪縛”でもあった。

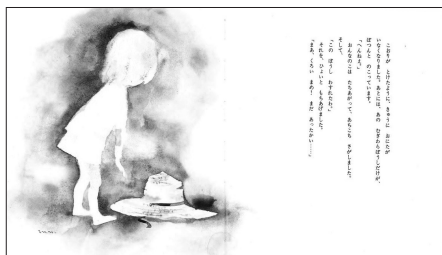
目の前の“現実”にうちひしがれた〈おにた〉にできたことは「おにだって、いろいろあるのに。おにだって…」と言うことだけだった——木村功さん\*15のご指摘のとおり、さっき〈まことくん〉ちを追われたときには思っただけだったけれども、しかし今度は実際に口に出して言ったのだ。木村さんは「人間の前で鬼の立場から最初で最後の発言をする」とおっしゃったが至言である——〈おにた〉は〈おんなのこ〉の前で一瞬、言葉によって自分自身を露わにしたのだ。それだけ彼の思いが強かったということだ。

彼が「かなしそうに みぶるいして」言ったというその言葉の含むところをどう受けとるべきか——反駁なのか抗議なのか、はたまた諦念なのか——は量りかねるが、結局のところ彼は帽子を脱ぎはしなかったから、その言葉が表す黒鬼の子供の思いは、ついに人間の子供に届くことはなかった。

もしや最後に〈おにた〉が帽子を脱いで自身の正体を露わにしたうえて「おにだって、いろいろあるのに。おにだって…」と言えたなら——そのときこそ〈おんなのこ〉がとらわれている“思いやりのうその世界”もほどかれて、そこにほんとうの“現実”が立ち現れたろう。その“現実”の世界で〈おんなのこ〉が〈おにた〉自身を受け容れたか拒絶したかは知らず、少なくともそこには“新しい現実”が開かれたかもしれない——そう思うと「誰かを責めることなどではしまい」とは言いながら、そもそも〈おにた〉に(ほんとうのことを隠して生きるように)と教え諭したものたち——それはきっと《黒鬼のとうさんとかあさん》だ——彼らにこそ「罪」があったと思われてしかたない。(前々稿参照)

## 【27-28 頁の絵と言葉】

(下の図版及び本文は後掲・註1に明記した書籍から法令の趣旨に違って引用した。)



〈おにた〉の姿が見えない——彼の帽子だけがぽつんと床に置かれている。

いわさきさんは、画面全体に黒褐色や暗褐色や焦茶色や黄土色や黄色やオレンジ色や薄紫色や紅紫色など

色々の絵の具をたらしこんで、その場に立ちこめる“気配”を描き止めた——それらの色々をよく見れば、実は前頁で〈おにた〉を描く際に用いられた色々だ。ああ、この“気配”は〈おにた〉そのものだ。言葉に尽くせぬ悲しみにうちひしがれた〈おにた〉は、あの帽子だけを残して“気配”となって宙に漂っているのだ。(もちろん「小さなくろおにのこども」でしかない〈おにた〉は“特権的な立場や能力”など持ちはしないから、彼自身の意志で以て“気配”となって雲霧四散したわけではけっしてあるまい。言葉に尽くせぬ悲しみのせいか、はたまた物語には現れぬ《さらに不可思議の存在》が〈おにた〉をあわれに思わっしやって、そうなるようになさったか——その存在を「かみさま」と呼んでも良いのかしれないけれど。)



〈おにた〉の“気配”のなかに人影が、いわゆる「ネガティブ・ペインティング」として、塗り残された画用紙の地色でシルエットみたく浮かび上がっている。絵筆をさっと刷いて描いた髪の毛が横顔をすっかり覆っているから、その人の面影や表情はまったく見えない。が、薄桃色の健やかそうな脚と白いソックスや薄紫色のワンピースと黄色の肘あてがわずかに描き添えられているから、これは確かに〈おんなのこ〉の影だ。彼女の周囲には薄紫色のほかしもうっすらと重ねられている——その色は〈おんなのこ〉の美しい登場シーン(13-14頁)にたっぷりと用いられて、彼女が帯びる“気配”を表すものだった。

その場に立ちこめる“気配”と化した〈おにた〉と〈おんなのこ〉の帯びる“気配”と——ふたりの“気配”がふわふわと漂いながら溶けあう。(こういう

“気配”の溶けあうなかで、人間の子供と黒鬼の子供との隔てがようよう除かれたと言うべきか。もちろん“当事者たち”さえ気づかぬことではあったけれども。）

〈おんなのこ〉は「知らない おとこのこ」の姿を見失っている。自分の周囲に立ちこめる“気配”に気づいている様子はまったくない——彼女は腰を少しかがめて、床に置き去られた帽子に右手を伸ばそうとしている。



物語の〈語り手〉は次のように話を進める。

こおりがとけたように、きゅうにおにたがいなくなりました。あとには、あのむぎわらぼうしだけが、ぽつんとのこっています。

「へんねえ。」

おんなのこはたちあがって、あちこちさがしました。そして、

「このぼうしわすれたわ。」

それを、ひょいともちあげました。

「まあ、くろいまめ！まだあったかい……」

〈語り手〉は「おにたがいなくなりました。」と言うが、それはその人が“おんなのこの代弁者”として語りをなしているからだ。確かに〈おんなのこ〉にはそう見えたらう。ただし絵を見た私（読者）はそうは思わない——〈おにた〉は“気配”となって確かにそこにいる、ただ姿が見えなくなっただけだ、悲しみのせいか、なにものかの不可思議な力が働いたせいかは知らないけれど。

〈語り手〉は続けて帽子の下に「まだあったかい」黒豆があったと語って、その黒豆がいかにも〈おにた〉が姿を変えたものであるかのように言うけれど、ただの「小さなくろおにのこども」である〈おにた〉が彼自身の意志で以てそうなったわけではあるまい——彼は“特権的な立場や能力”など持ちはしない子供なのだもの、みずから魔法を使って変身するなどあり得まい。だとするならば、やはり言葉に尽くせぬ悲しみに押しつぶされるように（“気配”と化するとともに一部が）黒豆になったのか、はたまた〈おにた〉のことをあわれに

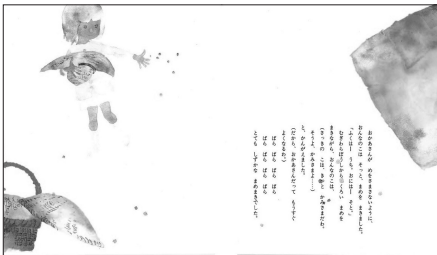


思わしかった《さらに不可思議の存在》が、今度は〈おんなのこ〉のことをあわれに思わしゃって、彼女の願いを叶えるためにどこからか豆まき用の黒豆を現してくださったのか——この物語が始まりの場面から「神話的」であったとするならば、後者のようなことがあっても良いのかしれない。(あの〈まことくん〉だって、まるで風神みたく宙を翔けていたくらいなもの。)

私(読者)は想像する——〈おにた〉は“気配”となっていて、ここにどままって、彼女が帽子の下の黒豆を見つけるのをかたわらで見守っている。彼女の願いが叶えられるのをすぐそばで見守っている。やはり〈おにた〉はずっと“善良”な子供だった。

### 【29-30 頁の絵と言葉】

(下の図版及び本文は後掲・註1に明記した書籍から法令の趣旨に違って引用した。)



見開き画面の左半(30頁)に豆まきをする〈おんなのこ〉が描かれている。帽子の下に黒豆を見つけた彼女は、それを逆さにした帽子のなかに入れ、少しずつ摘まんでばらばらまいている。彼女の願いは叶

たのだった。

画面左下には、台所に置かれていた竹(か籐)で編んだ籠(米麦や豆や野菜などの食材を入れておくのに使うのだろう)が、先ほど(19-20頁)のまま蓋を外した様子で描き添えられている。そのあたりにも豆が散らばっている。

見開き画面の右端(29頁)には〈おかあさん〉が横になっているお布団(の下のほう)が見える。台所との間のふすまを開け放って豆をまいたのだろう、布団の足下あたりにも豆が散らばっている。

〈おんなのこ〉は穏やかな表情を浮かべている。が、さっきまで彼女に寄り添っていた〈おにた〉の“気配”はもうそこにはない——〈おんなのこ〉が豆をまくのを見届けて、とうとうほんとうに雲霧四散してしまったのだ。



物語の〈語り手〉は次のように語りおさめる。

おかあさんがめをさまさないように、おんなのこはそっと、まめをまきました。

「ふくは—うち。おには—そと。」

むぎわらぼうしからくろいまめをまきながら、おんなのこは、  
 (さっきのこは、きっとかみさまだわ。そうよ、かみさまよ…)と、か  
 んがえました。

(だから、おかあさんだってもうすぐよくなるわ。)

ばらばらばらばら

ばらばらばらばら

とてもしずかなまめまきでした。

〈語り手〉はこの物語を「とてもしずかなまめまきでした。」という一文で語りおさめる——あの「知らないおとこのこ」も姿を消してしまって一緒にまいてはくれないし、もちろん眠っている〈おかあさん〉を起こしてしまっ  
 てはいけないし——〈おんなのこ〉はひとりでしずかに豆まきをした。

効果てきめんということでもあるまいが、さっきまですぐそばにいた「小さなくろおにのこども」は“気配”としてさえもういない。そして彼女はそのことにまったく気づきさえしない——ふたりの関わりあい<sup>は</sup>雲霧四散してあとかたもなく消えてしまった——「とてもしずかなまめまきでした。」とはそういう意味だ。

〈おんなのこ〉は、さっきまですぐそばにいた「知らないおとこのこ」のことを(さっきのこは、きっとかみさまだわ。そうよ、かみさまよ…)と考えたのだそう。もしや帽子の下に黒豆を用意したのはほんとうの「かみさま」だったかもしれないが、全身雪まみれになりながらご馳走を持ってきたのはほんとうは〈おにた〉だった。彼女のついた「思いやりのうそ」を「ほんと」に変える「思いやりのうそ」をついたのも〈おにた〉だった——すべて「致し方もないこと」だったにせよ、ほんとうのことをとうとう言わない(言えない)

まま、そのせいで〈おにた〉は言葉に尽くせぬ悲しみにうちひしがれて雲霧四散し、もう、ここにはいない。まさか〈おにた〉が誰かみたい(に)に(へえ、こいつはつまらないな)とか(おれにはお礼を言わないで、神さまにお礼を言うんじゃないあ、おれは、ひきあわないなあ)などと思うはずもないだろうけれど、せめてもの慰めは——その〈おんなのこ〉が、〈おにた〉が一生懸命についた「思いやりのうそ」によって創られた“思いやりのうその世界”にいて、この一時ぐらゐは幸せな心持ちでいる、ということなのだろう——〈おにた〉はそのことをきっと嬉しく思うことだろう。彼はずっと“善良”な子供だったのだもの。



さて“気配”となって雲霧四散した〈おにた〉はこのあとどうしたろう。そのまま雲霧のように消えてしまったろうか、それとも雲霧は再び凝り固まって元の姿を取り戻したろうか。

私は想像する——もしや〈おにた〉が元の姿を取り戻し、いまどこかで暮らしていたとしても、彼はもう二度と帽子を被りはしないだろう。あの「つのかくしのぼうし」はもう捨て置いたのだ——〈おにた〉はほんとうのことを知らせようとしなかった(知らせることができなかった)悲哀と後悔を胸にして、その悲哀と後悔を招くもととなった「つのかくしのぼうし」を捨て置いた。そのとき〈おにた〉は(ほんとうのことを隠して生きるように)と言った《黒鬼のとうさんとかあさん》の教え諭しも併せて捨て置いたのだ\*16。

もはや帽子を被ることなく(ほんとうのことを顕して)「黒鬼」として生きることを決めた彼はいま、立派なつのを生やした立派な黒鬼として、もちろん“親子の愛情の絆”を大切に思う“善良”な黒鬼として、鬼としての生涯を立派に過ごしているだろう——自分と同じように“善良”だった《黒鬼のとうさんとかあさん》との“親子の愛情の絆”を大切に思い続けながら。

ただし〈おにた〉は彼らの教え諭しを捨て置いたのだ。だから〈おにた〉はもう帽子は被らないし、いつか子供に恵まれたとしても、その子に(いいかい、おいらのように良い鬼になるんだよ)とは言い聞かせこそすれ、それに続けて(でもね、どんなに良い鬼になっても人間たちには分かってもらえないからね、だからこの帽子をいつだって被っているんだよ、さもないと人間たちは

おまえのことを…)などとけっして言いはしまい。(自分を隠せ)と教えた《黒鬼のとうさんとかあさん》とは違って、むしろ彼は(自分を顕せ)と言うだろう——たとえば「いいかい、鬼は鬼でいいんだよ。良い鬼でいさえするなら、いつか分かってくれる人間もいるかしれないからね。人間もいろいろいるみたいだしね。」のように。

扉絵から始まるような“もうひとつの物語”がもしやあったなら、その世界で〈おにた〉は立派な鬼として〈おんなのこ〉と〈おかあさん〉のために最善を尽くすのだろう、きっと。



作品末に付された「あとがき」のなかであまんさんは次のようにおっしゃった。(必要に応じて私に抄出した。)

ところで、文明の発達とともに、オニの魔力威力も地におちました。どうも、このごろのオニは、帽子をかぶりたがっている気がします。そして、トラの皮をまとった自らの姿をはじて、オニオコゼどころか、雲霧四散したがつているようにさえ思われてきました。

もしやあまんさんが(いわさきさんもまた)——鬼たちが頭に生えた立派なつのを誇りつつ、それぞれ立派な鬼として、(良くも悪くも)いかにも鬼らしい生涯をまっとうすること——を望んでいらしたとするなら私はとても嬉しい。この絵本が「ほんとうの自分自身を受け容れ、誇り、自分自身として生きてあること」の尊さを、それができなかつた子供の悲哀を描くことでほのめかす、そういう静かで慎ましい作品なのだろうと思うからである。

#### 〔註〕

- 1) あまんきみこ (文)・いわさきちひろ (絵) (1969)『おにたのぼうし』(ポプラ社)
- 2) 古田雅憲 (2021)「絵本『おにたのぼうし』を読む (1) — 「ぼうし」の含意をめぐって—」(「西南学院大学人間科学論集 17 (1) 西南学院大学学術研究所) 小稿において「前々稿」と言う。
- 3) 古田雅憲 (2022)「絵本『おにたのぼうし』を読む (2) — 「おもいやり」と「うそ」

をめぐって—」(『西南学院大学人間科学論集』17 (2) 西南学院大学学術研究所) 小稿において「前稿」という。

- 4) 島義弘 (2014)「幼児期の葛藤抑制の発達と“思いやりの嘘”」(『鹿児島大学教育学部研究紀要』66)
- 5) もちろん〈語り手〉が〈おんなのこ〉の心情に即して言葉を紡いだのはこれが初めてということではない。たとえば17-18頁の場面——〈おかあさん〉に「おなかですいたでしょう?」と尋ねられた〈おんなのこ〉が、「はっとしたようにくちびるを」かみながらも「けんめいにかおをよこに」振って「いいえ、すいてないわ」と否定するシーンだ。その「けんめいに」という表現は第三者的と言うよりは、やはり〈おんなのこ〉の心情に即した描写と見えるだろうが、その視点の揺らぎは一瞬のことである。それを承け、ここで「明確に」と言う次第。  
 ちなみに〈語り手〉は場面冒頭で“女の子の代弁者”として振る舞ったかと思えば、その直後には再び“世界を見守る者”のように語りを続け、さらには「おにたはいっしょうけんめい、さっきおんなのこがいったとおりにいいました。(下線は論者が私に施した)」と〈おにた〉の心情に言い及んで“おにたの代弁者”のようにも振る舞っている——語りの視点がゆらゆらと揺れる。それにあわせて私(読者)もまた〈おんなのこ〉になりきって少年のこことを見つめたり、〈おんなのこ〉に見つめられている〈おにた〉になりきって彼女の表情をうかがってみたりする。その視線の交錯が面白く、この場面の語りを実に魅力あるものにしてている。
- 6) 幾田伸司 (2011)「語られなかった状況を読むことの可能性—物語テキストにおける登場人物の「不在」に着目して—」(『国語科教育』70 全国大学国語教育学会) 33p.
- 7) 佐藤学 (2001)「節分の物語—あまん・きみこ『おにたのぼうし』を読む」(田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編 3年』東洋館出版社) 23-31p.
- 8) 鎌田均 (2003)「『読み』のベクトル—『おにたのぼうし』の場合—」(『日本文学』52(3) 日本文学協会) 13-25p.
- 9) 角谷有一 (2004)「『おにたのぼうし』を読み直す—新しい文学教育の地平を求めて—」(『日文協国語教育』34 日本文学協会国語部会) 32-43p.
- 10) 幾田伸司 (2010)「文学テキストにおける登場人物の不在に関する一考察」(『全国大学国語教育学会国語科教育研究：大会研究発表要旨集』118) 63p.
- 11) 上掲・註6に同じ。32-33p.
- 12) 上掲・註6に同じ。33p.
- 13) 鎌田均さん(上掲・註8 18p.)によれば「豆まきの日に赤飯や煮豆を食べる習慣のある地域は私の調べた限りでは見つからなかった」のだそうだ。であれば〈おにた〉がそれらを手に入れたのは実に僥倖と言うべきだ。この物語が「神話的」であるならば、そういうこともまた時に起こりうるのだろう。
- 14) 上掲・註8に同じ。18p.
- 15) 木村功 (2006)「教科書教材を「読む」(4) あまんきみこ「おにたのぼうし」論」(『岡山大学教育学部研究集録』133) 26p.
- 16) オレンジのタートルネック・セーターとページのチノパンは〈おにた〉と一緒に雲霧四散したのに、あの帽子だけがその場に残された——これは実に象徴的な出来事

だ。帽子と〈おにた〉の“異質性”が強調されるからだ。上着とズボンが（盗んだにせよ寸借だったにせよ）彼がみずから選び取ったものであったとするなら、帽子はそうではなかった——それは〈おにた〉にとってはやはり強いられたものであったということになるだろうか。なるほど、それは（物語にそれと描かれない）《黒鬼のとうさんとかあさん》が息子のために（良かれ）と思って（常に被っているよう）教え諭して授けたものだったろうから。

そういう帽子だけがその場に残された——ただの偶然ではけっしてあるまい、そこに〈おにた〉の意志を感じ取るのが必要なのではないかと思う。その「意志」こそ、まさしく〈おにた〉の“成長”と言うべきものだろうから。

西南学院大学人間科学部児童教育学科